

< 今日の説教のポイント ルカによる福音書 15 章 25～32 節 >

### 1 伝道礼拝ではなく、主の日の礼拝としてここを読む。

放蕩息子の例え話は兄の話無しでも成り立ちます。しかし、今日は、イエス様がファリサイ人や律法学者に向かって話された三つの例え話の最後であることを考えながら読みしたいと思います。

### 2 (25-28) 父とずっと一緒にいた兄が家に入らない？！

仕事を終えて畑から帰って来た兄は、放蕩生活をした挙句、突然帰って来た弟のために父親が祝宴を催しているのを知って、怒って家に入ろうともしませんでした(28)。ファリサイ人や律法学者たちが、イエス様が罪人を迎えて一緒に食事をしているのを見て「不平を言い出した」(2) 時もきっと同じ状態、すなわち、食事の席に加わろうとはしなかったことでしょうかから、彼らは兄を自分たちのことだと思ったでしょう。大事なのは、イエス様はここで弟の時と同様、父親が兄の所にわざわざ出て来てなだめる話をされたことです。「なだめた」(28)は「側へ呼ぶ、招く」とも訳せる語で、イエス様は兄も、そしてファリサイ人も祝宴に招いて下さっているのです！ それにどう応えるべきでしょうか？

### 3 (29-30) 神様と共にいられる恵みが分かっているか？

兄の口から出た言葉は、自分は父親と一緒にいたと主張する内容でしたが、そのことの喜びを感じられるものではありませんでした。弟が自分の愚かさに気づいて父親の元に帰って来たことを一緒に喜ばず、弟の非を責め、自分の正しさばかりを主張しました。結局、それはまだ父親と共にいられる喜びが分かっていないことを示すものだったのです。

### 4 (31-32) それでもなお見放されない神様。その恵みに応えて生きる！

兄の姿はファリサイ人であり律法学者の姿なのです。そして、同じ神様を信じている私たちにも、「あなたは大丈夫か」と問われているのです。神様が受け入れて下さることに基準がないわけではありません。しかし、この話から、それは私たちが正しいか間違っているかを判断して決めるような基準ではないことをつくづく教えられます。聖書の神様は、私たちが自分が赦されて神様と共に歩めることに感謝し、他の人もそうあってほしいと願って生きることを求めておられるのです。そのことをローマの信徒への手紙 12:9-21 を通して見ておきたいと思います。